

魔術師と女性使徒

―『殉教者キュプリアノス伝』と皇妃エウドキアのエージェンシー

足 立 広 明

はじめに

腹をたてた彼（サタン）は暴力で私を殺そうとした。全力でもって彼は私（キュプリアノス）を殺そうと試み、私の喉元を掴んだ。周囲にはだれも私を助けようとする者はおらず

死から逃れるのは不可能であつたのだが、

最も聖なる少女（ユースタ）の印が私の心に浮かんだ。

それは輝く十字の印であり、そのゆえに彼女は勝利を獲得した。^①

ユースタに倣ってキュプリアノスが身体で十字の形を取ると、サタンは攻撃することができなくなった。やむなく

退散せざるを得なくなったサタンは悔し紛れに「キリストが俺に仕えた者を歓迎したりするものか。お前は二つのことを台無しにしたぞ。俺との友情とお前自身だ。この悪党！」^②と捨て台詞を残して去って行った。

この言葉を聞いてキュプリアノスは不安に駆られ、集まっていた市民たちに問いかける。

「それゆえ、私の悲嘆を知る親愛なる諸君

私は自分の邪なる人生を諸君に告白する。

だから私をよく見て、哀れみを示してほしい。

言ってほしい。私がキリストを宥めることができるかどうかを。

彼が私の話に耳を傾け、手助けしてくれるかどうかを。

もしそうなら、私は恥ずべき道から逃れることができ
る。

私が以前とても馴染んでいた道から。」

群衆は長い間沈黙していた。

最後にある者が私によく聞こえる叫びで言った……⁽³⁾

果たして立ち上がった市民は彼キュプリアノスになんと
返答したのだろうか。残念ながら史料はここで途切れてい
る。しかし腕が欠けていることでかえってミロのヴィーナ
スの美的価値が高まるように、この史料も結末が分からな
いことでかえって印象深い文学的効果を獲得している。無
作為の一手によって芸術作品が完成することもあるという
好例であろうか。

古代末期の四世紀の地中海世界に奇妙な説話が流行して
いた。それは女性使徒テクラの道を歩む少女ユースタに恋
して退けられた青年アグライダスの依頼を受けた魔術師
キュプリアノスが、降霊術を駆使して悪魔を呼び出し、ユ
ースタを誘惑しようと試みるが失敗し、逆に彼自身がキリス
ト教に改宗し、やがてユースタともども殉教するという物
語である。

五世紀になって、皇后エウドキアが身に着けた古典教養
を駆使してこの民間説話を『改宗』『告白』『殉教』の三部
作から成る『殉教者キュプリアノス伝』（以降『殉教伝』）
として書き上げた。ただし、第三部『殉教』は失われ、残
存するのは冒頭に引用した第二部『告白』の途中までであ
る。本稿は、この『殉教伝』に作者エウドキアのエージェ
ンシー（主体）がいかに反映されているかを探ろうとする
ものである。

エウドキアは伝統宗教の黄昏とキリスト教の興隆を体现
する波乱万丈の生涯を送った。古典伝統の象徴とも言える
都市アテナイで哲学者の娘として生まれ、キリスト教ロー
マ帝国の新都コンスタンティノープルで洗礼を受けて皇后
となり、やがて追放されてイエルサレムで隠遁生活を送っ
て生涯を閉じた。単に劇的な人生を送った女性ということ
なら歴史上あまたある。しかし、クレオパトラはキリスト
教を知らず、ジャンヌ・ダルクは「異」教を知らない。エ
ウドキアはその一方から他方への移行の時代を生きたので
ある。しかも、彼女は自ら筆を執って書物を書き残した。『殉
教伝』には、この間のエウドキアの内面の変容過程をたど
ることができる」と予測される。

アメリカのブライアン・P・サワーズ (Sowers, 2020) は、男性の手を介さず、女性自身の声を直接伝える貴重な史料としてエウドキアの著作に注目し、とくに『殉教伝』の女性主人公ユースタの描写にコンスタンティヌス帝公認以降の新しいキリスト教モラルとエウドキアのエージェンシーを読み込もうとした。^④ 妥当な見解と思われるが、筆者はこれに加えて、物語内では男性であっても、一人称で自らの内面の葛藤を語りつつ歩むもう一人の主人公キュプリアノスにこそ現実を生きるエウドキア自身の姿が投影されているのではないかと考えている。ユースタは理想化された目標であり、現実のエウドキアはその理想を目指して迷いながら進まなければならなかったからである。先行研究と史料を踏まえ、以下この仮説をさらに詳しく検証する。

1…史料から推測されるエウドキアの生涯

具体的な検証に入る前に、まずはエウドキアの生涯について概観しよう。これについては、男性の年代記者や教会史家など史料も多く、また多くの研究者が検証を重ねてきたので、^⑤ 細部は別としておおよその描写は可能である。

まずはエウドキア存命中に執筆されて信頼のおける同時代史料とされる教会史家ソクラテスの語るところに耳を傾けてみよう。

皇后はまた自ら英雄詩を創作した。なぜなら、彼女はアテナイのソフィスト、レオンテイオスの娘だったので、高い教養を身に着けていたからである。彼は彼女にあらゆる学芸を教えた。主教アッティコスには彼女が皇帝に嫁ぐ直前に彼女に洗礼を授け、異教名アテナイスに代えてエウドキアというキリスト教名を授けた。^⑥

彼女は四〇一年ごろ、ギリシア古典文化の伝統がいまだ息づく学芸都市アテナイに哲学者レオンテイオスの娘として生まれた。幼名はアテナイスという。この命名については、父レオンテイオスがもととアンテイオキアなど他都市からの移住者であったから、余計に娘のアテナイ生まれを強調したのかもしれない。^⑦ とにかく、彼女は父から豊かな古典教養を授けられて育った。しかし、年代記作家マラルスの伝えるところでは、彼女が二十歳のころ、父はアテナイスにはだれにも勝る幸運があるので、遺産はそれだけ

で十分であろうという遺言を残して逝ってしまった。⁽⁸⁾これ
を聞いた兄ウアレリオスとゲシオスは二人で遺産を山分け
してしまった。困ったアテナイスは叔母を頼り、当時急成
長しつつあったローマ帝国の新都コンスタンティノープル
に出奔する。そのころ、アテナイスと同じく二十歳の皇帝
テオドシウス二世が妃を広く公募しており、これに彼女が
応募したところ、見事に皇帝の心を射止め、皇后に選出さ
れる。審査は皇帝の姉プルケリアがあたった。そのプルケ
リアの前でアテナイスは持ち前の教養を披露し、生来の美
貌と相まって確信を与え、皇帝もぞっこんとなり、めでた
く妃と決まった。彼女は洗礼を受け、以後エウドキアと名
乗ることになる。

マララスに始まるこのようなシンデレラ・ストーリーは、
『復活祭年代記』(Chronicon Paschale)などその後のビザン
ツ帝国の史料にも受け継がれるが、⁽⁹⁾額面通り信じる研究者
はほとんどいない。父の遺産を自分たちだけで山分けした
とされる兄ウアレリオスとゲシオスはエウドキアの皇后昇
進で罰せられるどころか高位に任官されているし、⁽¹⁰⁾エウド
キアのアウグスタ(正皇后)称号獲得は、彼女の叔父アス
クレピオドトスのコンスル就任直後の四二三年一月のこと

であった。⁽¹¹⁾このアスクレピオドトスは同時期のオリエン
ス道長官(prefectus praetorio Orientis)にも就任しており、
結婚を仲介した皇帝の側近パウリヌスをはじめ、教養知識
人層の相互のネットワークを通じてエウドキアは皇帝に推
薦されたと推測される。

そして、その際彼らのエウドキア推薦の政治的背景には、
独身のままアウグスタ称号を得て権勢をふるう皇姉プルケ
リアを牽制する狙いがあつたとも考えられている。⁽¹²⁾プルケ
リアはキリスト教の禁欲主義的修道運動の最初の高揚に掉
さし、神に身を捧げたキリストの花嫁として地上の男性と
の婚姻を拒否する誓約をし、妹たちにも同様の誓いを行わ
せた。こうすることで、自身やその妹たちと婚姻関係を結
んで権力を伸ばそうとする野心家たちの芽を摘み、隔絶し
た権威を宮廷で確立していたのである。⁽¹³⁾しかし、エウドキ
アの成婚後の四二〇年代初頭は対ペルシア強硬策の失敗な
どで一時期プルケリアの権威に翳りがみえ、エウドキアの
叔父アスクレピオドトスの対ユダヤ人、「異」教徒寛容政
策が打ち出されていた。⁽¹⁴⁾

しかし、成婚後のエウドキアの足取りは明確ではない。
プルケリアはエフエソス公会議(四三二年)前からマリア

崇敬擁護の立場で再びその地位を強め、アレクサンドリア主教キュリオスの懇請を受けてコンスタンティノーブル総主教ネストリオス追い落としに力を示した。一方エウドキアの陰は薄い。この間彼女は二女をもうけ、そのうち姉リキニア・エウドクシアは帝国西方との鎔としてウアレニティニアヌス三世に嫁いだ¹⁵。しかし、嗣子となる男子は生まれなかったと思われる。四三八年ごろ、西方から来た女性聖人小メラニアの宮中説教が彼女に転機をもたらす¹⁶。メラニアの説教に感動したエウドキアは、その後を追って最初のイエルサレム巡礼の旅に赴き、行く先々で大規模な恩恵施与行為を示した。とくに父の出身地と推測されるアンティオキアでは市民たちの前で共通の先祖を持つ仲間として謝辞演説を与え、アンティオキア市民も彼女の榮譽を称えて同市参事会と図書館に彼女の立像をそれぞれ奉納した¹⁷。聖地イエルサレムに至った彼女は小メラニアとともに聖ステファノスに聖堂を奉獻し、多くの聖遺物を携えて都コンスタンティノーブルに戻り、その勢威はブルケリアに匹敵するまでに至った。

しかし、ほどなくしてその人生は暗転する。ここでもマラスがおとぎ話めいたエピソードを伝えている¹⁹。あると

き、皇帝テオドシウス二世が乞食から大きな林檎を献上された。皇帝がそれをエウドキアに与えると、エウドキアは足を傷めて臥せっているパウリヌスに与えた。それをパウリヌスが出所を知らぬまま皇帝に献上したことから、両者には密通の疑いがかけられる。パウリヌスは処刑され、怒ったエウドキアは自ら望んで宮廷から離れ、再度聖地イエルサレムに向かい、そこで隠遁して生涯を終えることになる。

この話もそのまま真実と受け取る研究者はなく、そのころ頭角を現してきた宦官クリュサフィオスの策謀が背景にあるとされている²⁰。彼はまずエウドキアを指嚇してブルケリアを郊外の修道院に追いやり、ついで宮廷内でまだ一定の地歩を維持しているエウドキアを担ぐ教養知識人グループを排除していったという見立てである。もちろん、さらに検証が必要であろうが、ここではこれ以上立ち入らない。いずれにしても、四四三年以降彼女は聖地に向かい、二度と首都に戻ることはなかった。

しかし、聖地隠遁後も彼女に平穏は訪れなかった。彼女はアウグスタの称号は維持し、隠遁した現地に所領も有して、現地総督や主教たちにその意向を示すことができた²¹。当時のイエルサレムではキリスト教徒が幅を利かせ、他宗

教、とくにユダヤ人の巡礼を排除しようとしていた。そこでエウドキアがユダヤ人の嘆願を聞き入れ、ソロモンの神殿跡を訪ねることを許可したことから騒動が勃発した。²²話を聞いた砂漠の聖人バルサウマが配下の修道士の一団を率いてイエルサレムに現れ、彼らが祭礼に参加中のユダヤ人に石とこん棒で襲い掛かって死者が出た。これにはユダヤ人のほか現地のキリスト教徒住民の一部も怒り、エウドキアの要請で兵士が出動してバルサウマの配下を捕らえ、幾人かが処刑された。これが事態をさらに悪化させ、バルサウマの率いる修道士と群衆がエウドキア邸を包囲した。エウドキアは総督に応援を依頼したが、バルサウマの伝記によると、総督が彼を尋問しようとした途端地震が起り、恐れれた総督は捕らえていた修道士たちを釈放したという。²³おそろくなんらかの交渉による手打ちがあつたのであるう。

キリスト教徒の間でも争いがあつた。そのころ、受肉後のキリストの神性と人性の関係を巡って果てしない論争が繰り広げられていて、四五一年カルケドン公会議ではキリストは神と人の両方の性質に「*οὐκ*存在し、*ἀλλ'*両性は離れることも混じることもない」という信条が正統とされ、

東方の修道士に根強かつたキリストは両性「から」*ἐκ*成るという考え方は退けられ、弾圧されるようになった。²⁴後者は現在のコプト正教会などに続く合性論ないしは統一論の起源となるのだが、エウドキアは彼らを保護した。名目上とはいえ、まだアウグスタ称号を持つ皇后が叛旗を掲げることはローマやコンスタンティノープルの「正統」教会には困った事態であつたが、最終的には彼女は両教会と和解し、四六〇年ごろに没したという。

以上、やや詳細に過ぎたがエウドキアの生涯を概観した。ファンタジーめいた伝説に彩られてはいるが、生没年や婚姻、宮廷追放の時期、それぞれの節目の政治状況などは同時代の傍証史料もあり、おおむね事実と見て良いだろう。冒頭にも記したように、彼女は移行の時代古代末期を体験する人生を送った。アテナイで哲学者の娘として生まれて古典教養を身に付け、コンスタンティノープルで洗礼を受けて皇后となり、聖地イエルサレムで没した。死後は中東でもヨーロッパでも聖人として崇敬されている。

2. エウドキアの作品群とハマト・ガデルの

浴場碑文

エウドキアの波乱に富んだ生涯とその政治生活については、おとぎ話めいたエピソードもあつてか、多くの研究者が検証を重ねてきた。しかし、彼女自身の書き残した著作からその内面を探り、古代末期の社会や歴史の文脈のなかに位置づけようとする研究は、サワーズが自身の研究が最初であると言うように、これまでほとんど進展してこなかった。

その背景としては、一つには書き手が女性であること、二つ目にはその著作が伝統的な西洋古典学の範疇からも教会史や神学の範疇からも外れて研究者の視界に入らなかったこと、三つ目にはエウドキアに限らず、古代末期という時代自体が衰退、デカダンスの時代とされ、そこで生み出された文学作品など過去の亜流か模倣に過ぎないとされてきたことがある。筆者（足立）が別稿で分析するエウドキアのもうひとつの代表作『ホメロス風聖書物語』（Homeroicentones. Conscripio Prima）はホメロスの叙事詩『イリアス』と『オデュッセイア』を引用シャッフルし

て聖書物語とするものであるが、ホメロスの詩句の精神を理解しないままばらばらに引用してその価値を台無しにしてしまうもの、あるいは紹介する価値を見出せないものという評価がもっぱらであつた。

だが、このような評価は現在では大きく変化し、過去の作品をバラフレーズしながら同時代的意味を持たせて表現する古代末期の文学作品の独自性や創造性が見直され、爆発的な研究の進展がみられるようになった。ともあれ、エウドキアの残した作品を一瞥してみよう。彼女が多くの作品を書き残したことは九世紀のコンスタンティノープル総主教フォティオスの記録に明らかである。ダニエル書やゼカリア書、それにヘブライ語聖書の最初の八章のパラフレーズ、アンティオキアの榮譽を称えた賛辞とテオドシウス二世の対ベルシア戦勝記念の賛辞文、それに上述『ホメロス風聖書物語』と本稿で扱う『殉教伝』である。ただし現存するのは最後の二作品のみである。上述したアンティオキアでの賞賛演説は一行のみエウアグリオスの『教会史』にも引用され、ホメロス叙事詩に詳しい教養のあることがここからもうかがえる。

もうひとつ二十世紀後半になってからの発掘報告で明ら

かとなった史料がある。ゴラン高原のハマト・ガデルのローマ浴場跡で発見された碑文で、エウドキアの銘が付せられていた。銘自体は後に付されたものと推測されているが、本文はエウドキアの奉獻の可能性が強く、少なくとも彼女であればこのように考えるものと人々が受け取っていたことがうかがえる。そこで、彼女の思想を知る上でもこの碑文を一瞥してみよう。

アウゲスタ・エウドキアによる

私はこれまでの人生で数えきれない奇蹟を見てきたがしかしどれだけ多弁を弄しても、おおクリバノスよ価値なき人間がそなたの力を称えられようか それでもそなたは火のオケアノスと、またパエアンであり湯をもたらす配分者と呼ぶにふさわしいそなたからは無尽蔵のうねりがそこかしこある場所では熱湯が、別の場所では冷水とぬるま湯が四つの泉でそなたは美を四番目に注ぐ

インドの女と貴婦人、レペンティオスと聖エリヤ、アントニオス・エウスと露に濡れたガラティアと

ヒュゲイア自身、大きな浴場と小さな浴場
真珠と古いクリバノス、インドの女性、そのほかの
貴婦人、強壮な修道女性、それに総主教の泉
苦しみのなかにある人にとって、そなたの力はかぎり
ない

しかし、私はその技で知られた神を称えて⁽³¹⁾

これは彼女が修復した浴場のボーラーの働きを称えたもので、ここで特徴的なのは多様性の容認である。最終行にある「神を称えて」の神は単数形なので、キリスト教の唯一神と解釈できるが、それまでは主人公のボーラーをクリバノスという名で擬人化したうえ「火のオケアノス」などとギリシア神話の例えで語る。二段目になるとインドの女性とローマの上層女性、地元有力寄進者らしいレペンティオスとユダヤの預言者、ローマ皇帝らしい人物、修道女性、主教がごたまぜに並び、その合間に医療女神ガラティアとヒュゲイアが入っている。筆者（足立）が感銘を受けたのは「苦しみのなかにある人にとって、そなたの力はかぎらない」の一節で、ボーラーへの献辞、寄進者への献辞を経て、最後にそれらを統べる唯一神への献辞を置く前の一行、

本碑文で最も重要なメッセージがこれで、温泉はそれに入る者なら人種、宗教、性別、年齢にかかわらずだれしも平等に、どころか苦しむ人ほど良く癒すのだということが書かれている²⁰⁾。

古代に現代風博愛主義者を見出すことは禁物であるが、ここには難しい宗教理念ではなく、湯は人を選ばずに癒すという単純な真実が風呂好きのローマ人の経験から語られているようであり、また帝国を統治する立ち場や経営上の視点からも多様な立場の共存を願っているとも読むことができる。帝国はすでにキリスト教を唯一の信仰とし、公式見解的には「異」教の存在を認めない立場を取るようになっていた。しかし、運用面では「寛大さ」を示し、静穩に暮らすユダヤ人や「異」教徒の生活に踏み込んでまで取り締まりや改宗を迫ることまではしない場合が多く、エウドキアの叔父アスケレピオドトスはこの政策を取った。隠遁後のエウドキアの対ユダヤ人政策もこれと共通するものがあり、ハマト・ガデルの浴場修復も隠遁後のことと考えられている。

では、『殉教伝』には彼女の思想はどのように表現されているのだろうか。この点について以下の諸章でみてみよう。

3. 『改宗』と『告白』

『殉教伝』のキュプリアノスは同名の有名な北アフリカ教父とは無関係で、前述したように各地に流布した伝承を元にエウドキアが『改宗』『告白』『殉教』の詩作三部作に書き直したもので、最後の『殉教』は失われ、第二部『告白』途中で途切れている。舞台はディオクレティアヌス帝による最後のキリスト教迫害時代に設定されている。では第一部『改宗』と第二部『告白』のあらましをまずは把握することしよう。

第一部『改宗』は少女ユースタの物語として始まる。舞台はアンティオキアで、ユースタは窓辺から聞こえる聖人ブラウリオスの説教を聞いて信仰に覚醒する。

ユースタという名の敬虔な娘がいた。
父はアイデシオス、母はクレドニアといい、
アンティオコスの創建した偉大な都市の生まれであった。

この都市の近くには、目に美しい月桂樹の野が広がり、
糸杉の大枝が（風に）揺れ、

聖なるカスターリア（詩文の才を宿らせる泉のニンフ）の銀の雫が垂れる。

ここにプラウリオスというキリストを背負う者がいて極めて尊崇される賢明な天の使者（司祭）であり

中庸の徳と信仰を身に着け

神の書を学んで常に歌った。

良き信仰と神の代弁者の声を。

この声を柔和な娘は一心に聞き続け――

――というのも光を運ぶ窓があり――彼女の寝室から

良き司祭のいる家を見ることができたから。⁽³³⁾

ここまでの話は聖書外典『パウロとテクラの行伝』のテクラ登場シーンと酷似する。⁽³⁴⁾テクラも隣家のオネシフォロス邸で説教する使徒パウロの声が窓辺から聞こえてくるの一心に聞き惚れる。パウロに当たるのが聖人プラウリオスで、ユースタがテクラに当たる。しかし、違う点もある。外典のテクラは母が呼びかけても返事をせず、その後も沈黙を保つのだが、ユースタは目覚めた信仰を母に語って入信を勧める。自分たちは邪悪な悪魔や木や石で作られた偶像を崇拜しているに過ぎないと言うのである。これを聞いて

た母クレドニアは激怒し、父アエデシオスに報告するが、夜になると天使が彼らの夢枕に現れ、彼らを天国に至ることができるよう招いたので、驚いた二人は娘ユースタとともに三人でプラウリオスの許へ駆けつけ、回心する。ユースタはその後教会に熱心に通うようになる。⁽³⁵⁾

ところが、教会に通うユースタの姿を見た金持ちで偶像崇拜者のアグライダスが心を乱し、両親の許へ配下を遣わしてユースタを妻に迎えようとするが、ユースタによってすげなく断られる。しかし、欲情に駆られたアグライダスは配下の者たちとともに教会に押し入って力づくでユースタを凌辱しようとするが、教会の人々も武器を持って彼らを追い散らす。このとき、ユースタは自らアグライダスを投げ飛ばして退散させる。

しかし、彼は欲情で心がいつぱいになり

見境もなく少女を捕えようと試みた。

しかし、彼女はすぐにキリストの力強い印を示し

この悪漢を背中から投げ飛ばし、彼女の手でもって

アグライダスの頬髻と、同じく体をむしった。

彼女は彼の着飾った衣服を割き、皆の物笑いの種とした。

このようにして栄えあるテクラと同じ道を駆け抜けた後
ユースタは家路に向かった⁽³⁶⁾。

性的暴行を加えようとする相手を単独で撃退する点も外
典のテクラと共通し、彼女に倣った行動であるとはつき
り記されている。テクラの場合は、アグライダスにあたる
のは、同じくアンティオキアの名士アレクサンドロスで
あった⁽³⁷⁾。恥をかかされた男性が復讐に出るのも共通してい
る。アレクサンドロスの場合は市の総督に依頼してテクラ
を野獣刑にもらうが、アグライダスは魔術師キュプ
リアノスにユースタの誘惑を依頼し、依頼に応じたキュプ
リアノスが次々と悪魔を呼び出してユースタを誘惑しようと
する。キュプリアノスの初登場である。

しかし、アグライダスをこれを恨みに思い、邪な男に
依頼した。

邪悪な魔術を使う男キュプリアノスに

ニタラントの黄金と、銀貨を報酬として

この処女に、それを望まぬ性行為を強いるように。

アグライダスはキリストの屈することのない堅固な力

を学び知ることがなかった。

魔術師はこのみじめな男を哀れみ、降霊術でもって
苛だたせる邪悪な悪魔を効果もないのに呼び出した⁽³⁸⁾。

キュプリアノスが最初に呼び出した悪魔に「お前の成し
遂げたことを言ってみろ」と尋ねると、彼は天地を分けた
ことから始まり、エヴァを欺き、アダムを楽園から分かつ
て神の言葉である息子を十字架につけるように仕向けた
のも俺だと自慢した⁽³⁹⁾。そこで気をよくしたキュプリアノス
はこの悪魔をユースタの寝所に向かわせたが、彼女は悪し
き者が接近してくるのを感じ取り、体を十字の形にし、父
である神と子なるキリストに向けて、自分は聖なる処女の
ままでいたいので、敵の手に渡さないように一心に祈ると、
悪魔は退散せざるを得なくなった⁽⁴⁰⁾。

深く困惑して彼は魔術師のところに戻った。

キュプリアノスは悪魔に尋ねた。「娘はどこだ？」

できるだけ早く連れてこいと言っただろう⁽⁴¹⁾？」

しかし、敵は答えた。「そんなにおおっぱらに尋ねな

いでくれ。

俺はあの恐ろしい印を見て怖くなったんだ。⁽⁴²⁾」

そこで魔術師キュブリアノスは二番手により強力な悪魔のベリアルを送るが、これも敗退する。そこで最後にサタンが呼ばれる。サタンは策略をめぐらせ、若い女に化けてユースタを騙そうとする。

この愚か者は行つて聖なる少女の前に立った若い女に化けてそのような衣服をまといつて。

彼女のベッドに座り、騙そうと言つた。

「私は今朝来たばかりです。

私の愛する純潔に満足して。なぜなら

主なるキリストが身を捧げるように私を召命したからです。

ですので、親愛なる娘よ、私に語つておくれ。

愛すべき純潔の報いは何なのかを。何が報酬として支払われるのかを――

――私にはあなたがまるで死体のようであると思えるので――

日に焦がされた生活とからからに乾いた骨盤がその報酬なのかと。⁽⁴³⁾」

サタンはユースタと同じキリストのための独身禁欲生活を目指す女性であるかのように装いつつ、禁欲生活に疑問を投げかけていく。これにユースタが答える。

尊敬すべき処女は答えた。「直接の報酬はわずかですがより偉大な報いが後でやってきます。⁽⁴⁴⁾」

そこでサタンはエヴァの例を出して、さらにたたみかける。

悪をたくらむ者は言つた。「エヴァは処女で楽園でアダムと共にいたのでは？」

しかし後に、彼女は最初に生まれたアダムとともに暮らし、子どもたちの母と呼ばれました。

それ以降、彼女はあらゆる徳のある種族を生み出し、あらゆる善きことを学びました。⁽⁴⁵⁾」

これを聞いてユースタも「もう少しで悪魔の唆しに乗って外に出て行きそうに」なったのだが、「しかし、彼女は巧妙な敵の詐術に気づき、ただちに彼女の考えを祈りに向け、身体を十字の印にして、口から声を出して罪に満ち、心を塞ぐものを彼女の家から追い出した。」⁽⁴⁶⁾

切り札のサタンも敗れてすこすこと戻ってきたのを見て、キュプリアノスも彼を見限り、彼との誓約を破棄し、キリストの名を呼んでサタンを退散させた。⁽⁴⁷⁾

その後キュプリアノスは屈強な奴隷たちに命じてため込んだ魔術書を携えて教会に赴き、その罪を告白する。最初は怒って彼を追ひ払おうとする聖職者アンテミオスも彼の熱心さに説得され、その願い通りに魔術書や偶像を焼き払い、彼が教会に来ることを許可する。⁽⁴⁸⁾そして、安息日の朝の礼拝に参加するが、新規改宗者は途中で退出を求められる。しかし、このとき彼は「私は磔にされたキリストのしもべだ。その私を立ち去らせるといふのか」と反論し、その場に居座って頑張り通し、洗礼に漕ぎつける。

キュプリアノスは穏やかに、そして静かに座り続けた。すると、アステリオスという輔祭がこう言った。

「偉大なる主の（教会）から出ていきなさい。」しかし、キュプリアノスは彼に答えて言った。

「私は磔にされたキリストに仕える者です。その私に外へ出ていけというのですか？」輔祭は答えた。

「あなたはまだ全能の神に仕えるほど完全に授かったしもべではありません。」

これに応じてキュプリアノスは言った。「永遠に生きる神のみが邪悪な悪魔どもの醜さを暴きます。」

彼はかの処女（ユースタ）を救い、私に哀れみをかけました。

だから私がキリストの信仰に至るまでこの家から私が離れるのは正しいことではありません。⁽⁴⁹⁾

その後彼は教会で瞬く間に頭角を現し、次期主教にまで上り詰め、ユースタを女性執事に任命し、ユステイナと改名させてキリストに奉仕する処女たちの母とする。⁽⁵⁰⁾

つぎに第二部『告白』についてみてみよう。こちらは改宗後のキュプリアノスが過去を振り返る物語で、一人称単

数での内面の葛藤がより鮮明に描かれる。彼は幼少時にアテナイでアポロンに仕え、デメテルの秘儀にも参加する。このあたりはエウドキア自身の若年時代に重なる部分がある。物語はつぎのように始まる。

私はかの有名なキュブリアノスである。

私が子どものころ、両親はアポロンに仕え、幼いころに私は獣の犠牲の儀式や

地を這う蛇の儀式を学んだ。七歳のときに

私はバエトン・ミトラの秘儀を得て

高貴なアテナイ人のアクロポリスに住んでいた。

私は市民になったが、それは育ててくれた

両親を喜ばすこととなった。

十歳のとき、私は神のトーチに灯をともし、

コレーの白い悲しみの儀式（デメテル女神の祭礼？）に参加した。

またアクロポリスに座す狡猾なアテナ女神の秘儀も済ませた。

神殿のしもべとして秘儀を授かり

私はオリュンポス山に向かった。無知な人々はそこが

力のない神々の棲み処であると言⁵¹

デメテルやコレーの秘儀、アクロポリスの丘のアテナ女神など、古代アテナイの生活空間を彷彿とさせるが、それにしても神々も祭礼も邪悪なもの、悪魔化され過ぎている気がする。前述のハマト・ガデルの碑文に見えるさまざまな神々がとくに咎められることもなく、むしろ温泉の効能を高める良き勢力として描かれる明るい世界とは程遠いのはなぜなのだろうか。別稿で扱う『ホメロス風聖書物語』もハマト・ガデルの碑文と共通する多宗教多文化共存の雰囲気があるのに対して、『殉教伝』は『改宗』も『告白』もキリスト教による他宗教への一方的な断罪が基調となっている。

ともあれ、彼はその後オリュンポスやスバルタを経て、スキュティア、エジプト、カルデア（バビロニア）など各地を巡って魔術を修行、サタンの右腕となるまでに成長する⁵²。エジプトでは擬人化された悪徳を列挙し、カルデアでは光や火に仕える人々、この世の創造者デミウルゴスに仕える人々にも出会う⁵⁴。これはゾロアスター教徒ないしはマニ教徒を連想させる。ともあれ、彼は最後にアンティオキ

アに戻って、『改宗』と同じくアグライダスからユステイナの誘惑を依頼され、次々と悪魔を差し向けては敗れ、改宗する話になる。ちなみに『告白』では娘の名はユースタではなく、最初からユステイナである。

『告白』では『改宗』と違って、サタンはなかなかの難敵である。『改宗』でもキリスト教徒女性に化けてたぶらかそうとして、ユースタもあやうく引つ掛かりそうになるなど、他の悪魔よりは手ごわく描かれているが、ユースタに敗れるとあつさり退散する。ところが、『告白』のサタンは、ユステイナに術が通じないとなると、彼女の両親の家畜を殺して脅す⁽⁵⁵⁾。ユステイナが両親を励ましてこの危機を凌ぐと、サタンはさらにアンティオキアに疫病を流行らせる⁽⁵⁶⁾。これもユステイナの祈りで阻止され、これに市民が感謝して改宗し、キュプリアノスが罪に問われる。そこでキュプリアノスもサタンを見限るところで、拙稿冒頭のサタンとキュプリアノスの対決場面に至るのである。そして、ここでもサタンは『改宗』のようにあつさりとは引き下がらず、自分に仕えた者はキリストに歓迎されないという捨て台詞を残して去り、不安を抱いたキュプリアノスが市民に救いを乞い願う最後の場面に至って史料が途切れるので

ある。

4…エウドキアとキュプリアノス —古代末期の女性のエージェンシー—

さて、いささか詳細にわたったが、このような物語をいかに解釈すべきだろうか。サワーズは自ら変容するテクラに対して、ユースタが自らは変わらなず周囲を変えていく点に注目し、そこに新しいキリスト教女性の理想形を見出す。外典のテクラは母テオクレイアの心を変えることはできず、それどころか婚約者タミユリスを捨てて使徒パウロと愛し合っていたかのような姿で発見されたテクラを見てテオクレイアの感情の糸は切れ、実の娘テクラを火炙りにするよう総督に依頼する⁽⁵⁷⁾。神が雨を降らせる奇蹟でこの難を逃れたテクラはパウロとともに旅に出るが、生まれ故郷の町イコニオンと家族は捨てることになる⁽⁵⁸⁾。一方、ユースタは天使の助力で父母の改宗に成功し、一家で揃って教会に出かける。それ以後も彼女はアンティオキアの自宅に留まり続け、キュプリアノスの差し向けた悪魔も自室で迎え撃つ。そして、最終的には彼も、アンティオキアの市民もキ

リスト教に改宗させることに成功するのである。

サワーズの考えでは、ほかにテクラは一人で旅するにあたって男装するが、ユースタは最後まで女性であることをやめず、周囲をむしろ女性化しており、この点もエウドキアの女性としての主体性が反映しているということになる⁽⁵⁰⁾。彼の解釈は、ヴィクター・ターナー (Victor Turner) の社会的ドラマの理論に対する中世史家キャロリン・ウォーカー・バイナム (Caroline W. Bynum) の批判に依拠している⁽⁵¹⁾。ターナーの理論では状況の反転や場所の移動でドラマは構成されるが、バイナムはこれを「男性の物語」を前提としていると批判し、「女性の物語」にドラマはなく、何も起こらないこと (nothing happens) が特徴だとして、家庭や修道院に留まる中世後期の聖人伝の女性を例示する。ユースタもまた故郷の都市と家族から離れず、サワーズの考えではコンスタンティヌスの公認以降、キリスト教が体制宗教化し、都市や家族を守る側になるモラル上の変化がここに現れているのである⁽⁵²⁾。妥当な解釈として、うなずける点は少なくない。

しかし、筆者 (足立) には、それはまだ半面の真理に留まると考える。ターナー批判およびコンスタンティヌス以

降の社会変化への見通しは妥当であるとしても、「女性の物語」にドラマがないというのは、時代と地域を無視した固定的性別役割を前提としているように思えてならない。バイナムのモデルはキリスト教が確立して千年後の西欧中世後期の社会を念頭においたもので、当時のジェンダー的制約のなかで生きる女性の主体性を拾い出す手段としては有効であるのかもしれない。しかし、エウドキアの生きた古代末期はまだキリスト教自体が未確立な移行の時代であることを忘れてはならない。消滅しかかっているとはいえず、まだ伝統宗教も健在で、一方キリスト教徒も何が正統信仰であるかの神学論争の渦中にあった。上述のように、エウドキアはエフェソス公会議とカルケドン公会議の同時代人であり、不寛容さが増す風潮のなかで合性論の人々やユダヤ教徒を擁護した。同じころ、西方ではローマ帝国は急速に崩壊し、アウグスティヌスが『神の国』を書いていた。このような価値観の揺れ動く時代のなかで、女性たちもまた、それぞれ新しい宗教規範を探す旅をしなければならなかったのである。筆者は聖書外典のテクラの自己洗礼場面に神の前に立つ個人としての女性の自己決定の瞬間を見出し、これが古代末期の女性たちの指針となったとこれまで

多くの論文で書いてきたが、エウドキアの作品のなかにもそれに相当する場面が見出せると考えている。

この点に関連して、筆者はサワーズが言及しない、より本質的な相違がユースタとテクラにはあると考えている。それは場所の移動でなく、一人称によって語られる内面の変化の有無である。外典のテクラは、最初は沈黙していたが、危機に瀕して語り始め、やがてはつきりと自らのアイデンティティについて語るようになる。一方ユースタにはそのような場面はない。言い寄る男性を撃退する場面で、テクラは都市イコニオンの第一人者から神の女しもべとなった自らのアイデンティティの変化を口に出して叫ぶのに対し、ユースタは実力行使ではテクラを上回っても、無言のままである。彼女の場合、信仰に目覚めた後は神に護られた万能ぶりを示すのみで、語る言葉も神学的理念が彼女の口を通して発せられているだけで、彼女個人の内面はうかがえない。『テクラ行伝』だと、彼女はむしろパウロに近い、イデオロギー的な物語枠の役目を担っている。

では、一人称による内面の変化はどこで現れるのか。それはキュプリアノスの語りに現れるのである。テクラが「市民の第一人者」から「神のしもべ」へと変容するように、キュ

プリアノスもまた魔術師からキリスト教の聖人へと変容する。理想のテクラであるユースタよりも、改宗に際して聖職者や市民とのやりとりで吐露されるキュプリアノスの言葉のほうが外典のテクラに、またエウドキアの本心にも近いのではないのだろうか。

作中人物はすべからく作者の分身であるとするなら、女性が作者の場合、作中では男性であっても「彼」は作者女性のエージェンシーを運ぶ者と見てよい。もしそうでないと言うのなら、「いくら作中で女性が活躍しても、それは所詮男性作者の願望や投影に過ぎないのだ」に類する膨大な言説が「学問的中立」の装いを取って発せられ続けていることの一切が問い直されなければならない。作中女性が男性執筆者の表象であるなら、作中男性も女性作者の表象と見るべきなのである。宝塚歌劇や少女漫画などにその身近な実例を見ることができ、キュプリアノスもまたエウドキアのエージェンシーを運ぶ作中人物なのである。

その視点からすると、エウドキアとキュプリアノスどちらも「異」教市民の実力者からキリスト教共同体の指導者へ変容していることが理解される。アテナイ出身で、東地中海世界各地を行脚するのも同じである。『改宗』後半、

教会から退出を求められたキュブリアノスは、「私は磔にされたキリストのしもべだ。その私に出ていけというのか⁽⁶⁴⁾」と言いつ返す。それは彼女自身を含めた新規改宗者の抱く不満、あるいは不当にも宮廷から退去を求められた彼女自身の体験が現れているのかもしれない。一方、『告白』では、彼は自分に仕えた者はイエスに歓迎されないとサタンに脅かされて不安にかられ、その心境を市民の前で吐露する⁽⁶⁵⁾。これもまた彼女を含む新規改宗者、ないし改宗希望者の抱く不安に通じる。当時の物語は聴衆の前で作者が読み上げていたことを想起すると、エウドキアの過去を知っている当時の聴衆が、その経歴と全く無関係にこの話を聞いていたとは思えない。つまり、この物語はゆるぎない信仰を持つユースタが愚かな偶像崇拜者たちを一方的に打ちのめしていく物語なのではなく、キリスト教の選択を迫られた当時の多くの人々の迷いの側から描かれていると読めるのである。このように読むとき、ハマト・ガデルの碑文や『ホメロス風聖書物語』で表現された多様な宗教や文化の共存する明るい世界とは別種の、一見すると「異」教を邪とする偏狭で不寛容な世界が展開している矛盾も理解できる。

理想化されたユースタよりも、古代末期の現実を生きるエウドキアの人生は、はるかにキュブリアノスのそれに近かった。彼女はユースタのように生まれ故郷に留まることも、家族との安定した生活を維持することも適わなかった。アテナイを出奔してコンスタンティノープルに向かったのは兄たちに追い出されたからではなく、親族を含めた教養市民の推薦によるものであったのかも知れないが、それが彼女の望んだものであったかはわからない。皇后となってもついに嗣子には恵まれず、もう一人のアウグスタである義姉ブルケリアの宗教的カリスマ性の陰に隠れがちで、結局はここからも事実上追放されることになる。そして、落ち着いた先の聖地でも平安は訪れず、最後まで争いから無縁の生活は訪れなかった。女性にはドラマがないどころか、男性でも減多に体験できない大きな時代の変化を望みもしないのに一人で抱えねばならなかったのである。

では、作中人物とは言え、なぜわざわざ男性登場人物に一人称語りをさせてまで自己投影したのであるうか。単純には元の説話の設定をなぞったからとも言える。しかし、登場人物の配置や語りはパラフレーズする作者の選択の範囲内にあり、じつさい古代末期のパラフレーズ作品はそこ

で腕を振るい、独創性を発揮する。ユースタに自己投影していたのなら、彼女にもっと語らせ、魔術師キュプリアノスなどは、愚かな他者男性の改宗者として描いてもおかしくはないところである。

おそらく、本作には『テクラ行伝』の逆を行こうとする狙いがあったのではないだろうか。『テクラ行伝』では当初は「異」教徒であったテクラが使徒パウロに従い旅に出るが、やがてそのパウロからも離れて自立し、彼と対等な女性使徒にまで成長する。エヴァともマリアとも異なる古代の自立した女性モデルとも目される所以であるが、それでも男性パウロを指標に成長する物語である。ところが、『殉教伝』は『改宗』『告白』とも女性ユースタ（ユスティナ）を指標として男性の「異」教徒キュプリアノスが主教にまで成長する物語である。サワーズが言うように、女性ユースタは理想とされている。しかし、男性であるキュプリアノスがその理想に導かれつつ地上の男性性や情欲から離れ、自立していく物語とすることで、女性を情欲の対象、男性に従属する者とする通念からも離れることになる。キュプリアノスは魔術を用いている間はユースタに接近しようとしていたが、回心後は彼自身の道を歩み、ユースタ

は最後の場面まで再登場しない。彼は最終的に主教となったときにユースタあらためユスティナを現地の処女たちの監督に任命するが、これは職務を果たしたに過ぎない。つまり、放浪する女性使徒テクラは、家の中に留まるユースタだけでなく、魔術師キュプリアノスの装いを取って、いっそう強く生き続けていたと言えよう。

結論と今後の展望

以上みてきたように、『殉教伝』はユースタだけでなく、キュプリアノスをセットにして考えた場合により明快に読み解くことができると思われる。サワーズが言うように、自ら動かず外部との境界を「女性化」するユースタは、キリスト教公認後の新しい女性の理想形を示すと思われる。しかし、理想が意味を持つのは、それに向かって進む人間あつてのことである。移行の時代である古代末期においては、女性たちもまたそれぞれのアイデンティティを探索旅をしなければならなかった。エウドキアも動かぬユースタを理想としながら、自らは故郷と家族から離れ、宮廷から追放され、聖地でも心安らかとならぬ波乱の人生を歩んだ。

彼女はその現実の姿をキュプリアノスに仮託したのではないだろうか。

註

- (1) Arthur Ludwich, *Eudociae Augustae Proci Lycii Claudiani Carminum Graecorum Reliquiae*. Lipsiae (Leipzig), 1897, 447-453, p.77; Brian P. Sowers, *In Her Own Words: The Life and Poetry of Aelia Eudocia*. Cambridge, MA., 2020, p.155. サワースは『殉教伝』最初の英訳を付している。なお、本稿の史料訳文はサワースほか各史料の近代語訳を参照しつつ、筆者自身により訳出したものである。
- (2) Ludwich (1897), 467-468, p.78; Sowers (2020), p.155.
- (3) Ludwich (1897), 473-479, p.79; Sowers (2020), p.156.
- (4) Sowers (2020), p.5, pp.85-93.
- (5) わが国でもエウドキアの政治生活については、井上浩一氏によるバランスの取れた紹介がなされている。井上浩一「アテナイス・エウドキア（四〇一―四六〇年）―ふたつの世界を生きた非劇のシンデレラ」『ビザンツ皇妃列伝』筑摩書房、一九九六年、15―42頁。また、海外でも古くからの多くの研究蓄積がある。以下代表的なものをピックアップする。H. Gregorovius, *Athenais. Geschichte einer byzantinischen Kaiserin*. Leipzig, 1881; H. G. Beck, "Eudokia". *Reallexikon für Antike und Christentum* 6, 1966, pp.844-847; K. G. Holm, *Theodosian Empresses: Women and Imperial Dominion in Late Antiquity*. Berkeley, 1982; J. Burman, "The Christian Empress Eudocia". In : J. Y. Perrat ed., *Les femmes et le monachisme byzantin*. Athens, 1991, pp. 51-59; Al. Cameron, "Wandering Poets: A Literary Movement in Byzantine Egypt". *Historia* 14, 1965, pp. 470-509; -----, "The Empress and the Poet: Paganism and Politics at the Court of Theodosius II.". *Yale Classical Studies* 27, 1982, pp.217-289; -----, "Poetry and Literary Culture in Late Antiquity." In: Swain, S., and M. Edwards, eds., *Approaching Late Antiquity: The Transformation from Early to Late Empire*. Oxford 2004, pp.327-354.
- (6) J. P. Migne, *Patrologia Graeca*. LXII. Paris, 1859. Socrates, *Historia Ecclesiastica* VII, 21, p.784; P. Maraval and P. Perichon, Socrate de Constantinople, *Histoire ecclésiastique* (Livres I-VII) (Texte grec par G.C. Hansen). Paris: Éditions du Cerf, 2004-2007. Liv. VII, 21, 8-9 (Retrieved from: <http://stephanus.tlg.uci.edu/Iris/Cite?2057:002:776109>; <http://stephanus.tlg.uci.edu/Iris/Cite?2057:002:777439>)
- (7) 同時代史料（総主教フォティオスに収録されたオリュンピオドロスの記録）で、アテナイの修辞学者の職にレオンティオスという人物を推薦したところ、外国人に義務付けられた恥ずかしい通過儀礼に躊躇して当初就任をためらったとあり、これがエウドキアの父と推測されている。また、そ

- の際彼の出身地はアンティオキアではないかとされ、そのために後世エウドキアが、『イリアス』のアカイア方とトロイア方双方の英雄ディオメデスとクラウコスの武器交換に例えて、先祖を同じくする者同士のエールを交わす賛辞演説を行なったとみせようとしている。 Holm (1982), pp.115-119; Sowers (2020), pp.15-18.
- (8) Thurn, *Iannis Malalas chronographia* [Corpus Fontium Historiae Byzantinae. Series Berolinensis 35. Berlin - New York: De Gruyter, 2000] (Malalas, 14-4). Retrieved from: <http://stephanus.tlg.uci.edu/Iris/Cite?2871:004:535640>.
- (9) Ludwig August Dindorf, *Chronicon Paschale*. Bonn, 1832, pp.576-578.
- (10) J. R. Martindale, *The Prosopography of the Later Roman Empire*, vol. 2, *AD 385-527*. (公経 PLRE, II) Cambridge, 1980, 'Valerius' 6 (p. 1145), 'Gesusus' 2 (pp.510-511). ホントハモウアレリウスがすぐにエウドキアの婚姻前に総督職を得ていた可能性を示唆している。 Holm (1982), pp.119-120.
- (11) PLRE, II, p.160; Holm (1982), pp.123-124.
- (12) Holm (1982), pp.120-122.
- (13) 足立広明「皇姉ブルケリアー帝国と教会を支配した禁欲の処女」『歴史学研究』704号、1997年、24-36頁。
- (14) Holm (1982), pp.124-125.
- (15) Licia Eudoxia 2, PLRE, II, pp.410-412.
- (16) Denys Gorce, ed. et tr., *Vie de Sainte Mélanie*, Paris, Source Chrétienne, 1962, 55-56, p.235-237.
- (17) *Chronicon Paschale*, p.585, Sowers (2020), pp.12-18.
- (18) *Vie de Sainte Mélanie*, 58-59, pp.240-246 (voyages d'Eudocie); Elizabeth A. Clark, "Claims on the Bones of Saint Stephen: The Partisans of Melania and Eudocia", *Church History* 51, 1982, pp.141-156; Sowers (2020), pp.18-20.
- (19) Thurn, Malalas, *Chronographia*, 14: 8, pp.272-278, Retrieved from: <http://stephanus.tlg.uci.edu/Iris/Cite?2871:004:542054>. *Chronicon Paschale*, p.584-585.
- (20) Holm (1982), pp.191-194.
- (21) Holm (1982), pp.218-219; Sowers (2020), p.22.
- (22) Johannes Hahn and Volker Menze, eds., *The Wandering Holy Man : The Life of Barsauma, Christian Asceticism, and Religious Conflict in Late Antique Palestine*. Berkeley, 2020, § 91.1-3, p.228.
- (23) Ibid., § 96.1-18, p.234-235.
- (24) 足立広明「古代末期の単性論派運動」『古代文化』43 (7)、1991年、1-17頁。なお、この時点では筆者(足立)は「単性論」という呼称を用いているが、これがカルケドン派側からの一方的な誤解と断罪のための呼称の側面が強く、彼らが追い落とそうとする人々は受肉後のキリストは神性が人性を吸収して神性のみとなったと主張しているとしたものであることは意識して書いている。当時は別の呼称を考えていたがなかったが、拙論での「単性」とは神性

が人性を吸収するということではなく、両性「から」混じることなく一つの救世主の性質が生まれたという理解であり、現在の「合性論」ないし「統一論」という呼称に近いものと考えている。ただし、カルケドン派から非カルケドン諸派の間には微妙な差異を持った多種多様な考え方があり、一概にまとめることはできない。

- (25) Sowers (2020), p.2.
- (26) 足立広明「マケランジェロより千年早く―皇妃エウドキアの『ホメロス風聖書物語』と聖母の嘆き」『古代中世キリスト教の女性イメージ』（教文館、2005年刊行予定）
- (27) Elizabeth Barret Browning, *The Greek Christian Poets*, 1842. たなか、筆者（以下）に以下を参照。 Mark D. Usher, *Homeric Stitchings. The Homeric Centos of the Empress Eudocia*. Lanham, 1998, p.1.
- (28) A. Ludwich (1897), *Eudociae Augustae*, pp. 87-88.
- (29) 非常に多くの研究があるが、その皮切りのひとつは次の著作の著者 M. Roberts, *The Jeweled Style: Poetry and Poetics in Late Antiquity*. NY, 1989. 『ホメロス風聖書物語』にいくつか近年急速に研究が進んでいるが、詳細は拙別稿（註26）を参照された。
- (30) René Henry, ed., *Photius: Bibliothecue*. 8 vols. Paris, 1959-1977 : esp., vol2 (12th version, 2003), codices 183-184, pp. 195-199.
- (31) Hirschfeld, Y., ed. *The Roman Baths of Hammat Gader*.
- (32) Jerusalem, 1997, pp.228-233.
- (33) C. Bevegni, "Eudociae Augustae Martyrium Sancti Cypriani I, 1.99," *Prometheus* 8, 1982, 9-21, pp.249-262; Sowers (2020), pp.131-132.
- (34) Lipsius, H.A., et M. Bonnet, "Acta Pauli et Theclae" (ATh), *Acta Apostolorum Apocrypha* (Leipzig, 1891), pp. 235-273, esp. 7, pp.240-241.
- (35) Bevegni, 38-92, pp.259-261; Sowers (2020), pp.132-134.
- (36) Ludwich (1897), 8-14, p.25-26; Sowers (2020), p.134.
- (37) ATh. 26, pp.253-254.
- (38) Ludwich (1897), 16-23, p.26; Sowers (2020), p.134.
- (39) Ludwich (1897), 29-51, pp.27-28; Sowers (2020), p.135.
- (40) Ludwich (1897), 57-96, pp.28-31; Sowers (2020), p.135-136.
- (41) Ludwich (1897), 98-99, p.31; Sowers (2020), p.136.
- (42) Ludwich (1897), 100-101, pp.31-32; Sowers (2020), p.137.
- (43) Ludwich (1897), 149-158, pp.35-36; Sowers (2020), p.138.
- (44) Ludwich (1897), 159-160, p.36; Sowers (2020), p.138.
- (45) Ludwich (1897), 161-166, p.36; Sowers (2020), p.138.
- (46) Ludwich (1897), 169-172, pp.36-37; Sowers (2020), p.138.

